岐阜県立池田高等学校と朝日大学教職課程センターによる
「総合的な探究の時間」を中心とした高大連携の推進
－教員養成教育の質的向上を目指した取組として－

虫賀 文人、山下 廉太郎、足立　淳、藤田 明宏、和田 隆明、石原 弘也、亀田　研

要　　約

本稿では、岐阜県立池田高等学校と朝日大学教職課程センターによる高大連携の概要について報告するとともに､今後の望ましい高大連携のあり方について論じた。この連携は、高校生が「総合的な探究の時間」に取り組んでいる課題研究に対して教職を目指す大学生が支援するという活動から始まり、その後、教育連携協定の締結を経て、活動の幅を広げつつある。そこに至るまでの経緯や取組、そして、実践の内容について論じながら、教職を目指す大学生にとっての高大連携の意義と今後の課題について考察した。

キーワード

高大連携　　総合的な探究の時間　　課題研究　　SDGs　　教員養成教育

はじめに

本稿は、2022 年度に開始された岐阜県立池田高等学校（以下、池田高校）と朝日大学教職課程センター（以下、教職課程センター）による高大連携の概要について報告するとともに、今後の望ましい高大連携のあり方について論じるものである。

高大連携とは「高校と大学とが連携して行う教育活動」のことであり、文部省（現・文部科学省）が高大連携の推進の姿勢を初めて打ち出したのは、1999 年 12 月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」[1] においてであった。この提言では、大学の科目等履修制度を活用して、高校生が大学の教育を履修できるようにすることや大学教員が高等学校を訪れ、専門分野の学問の紹介や講義を行うことなど具体的な教育上の連携方策が示された。そのため、当初の高大連携では「大学教員が高校に出向き、講義をする」というものが一般的となり、高校生に大学レベルの教育に触れる機会を提供したり、高校と大学との学びの違いを説明したりすることで、大学で学ぶ意欲を高校生に持たせるという点では大きな効果が得られたが、結果的に、高大連携は大学の PR や学生募集につながるものが多くなっていった。

川合宏之（2018）は、高大連携の高校生側のメリットとして「興味のある事柄を突き詰め、より深い部分まで学べる機会を与えられる」こと、また、「高校で学ぶことができる範囲には設備・機能的にどうしても限りがある」ため「大学にしかできない経験を良い意味で「先取り」することは高校生のモチベーションの向上に繋がる」ことを指摘し、大学

生側のメリットとして「大学生が高校生を指導し、大学で習った知識を還元すること」、「人に何かを教えることで、自身の知識の強化にも繋がり、大学生側のモチベーションの向上にもなる」と述べている[2)]。

後述する池田高校と教職課程センターによる連携でも、この大学生側のメリットを活かし、教員養成のための高大連携に取り組み、実際の現場で高校生や高校教員と直接交流することで教員になるための資質・能力を向上させることを目指している。現段階の連携では、高校生が「総合的な探究の時間」において取り組んでいる課題研究に対して、教職課程を履修している大学生が仮説の立て方や発表の仕方が適切であるかどうかについて助言や支援を行っている。高校生は、大学生の言葉に真剣に耳を傾けることで、研究をさらに深めるためのヒントを得ることができ、教職を目指す大学生にとっても、高校生にとって有益な支援とは何かを、また、適切な助言をするためには自分自身も研鑽を積まなければならないことを学ぶことができ、双方にとって実り多き時間となっている。今後、この連携をさらに発展させていくための方途について検討するために、以下では、まず、全国でこれまで実施されてきた主な「総合的な探究の時間」における高大連携の事例から見ていく。

1.「総合的な探究の時間」に活かせる高大連携とは

高等学校の学習指導要領では、「総合的な探究の時間」の目標を、「(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする」、「(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする」、「(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う」としている[3)]。

そして、探究課題の設定の仕方については、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の将来に関する課題などを踏まえて設定すること」としている。このような探究課題を設定し、活動に取り組むためには、外部や専門的な視点からの助言が必要であり、それにより社会とのつながりをイメージしやすくなる。そういう意味で、専門的な研究に取り組む大学生の協力に期待できる部分は大きい。実際には、**図 1** の「探究における生徒の学習の姿」の「探究の過程を経由する」にある、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の部分で大学生が助言や支援を行うことになるが、それにより、**図 1** にあるように最初に生徒が設定した探究課題がよりスパイラルアップしていくことになると考えられる。

「総合的な探究の時間」を中心とする高大連携には、多くの先行する事例がある。注目

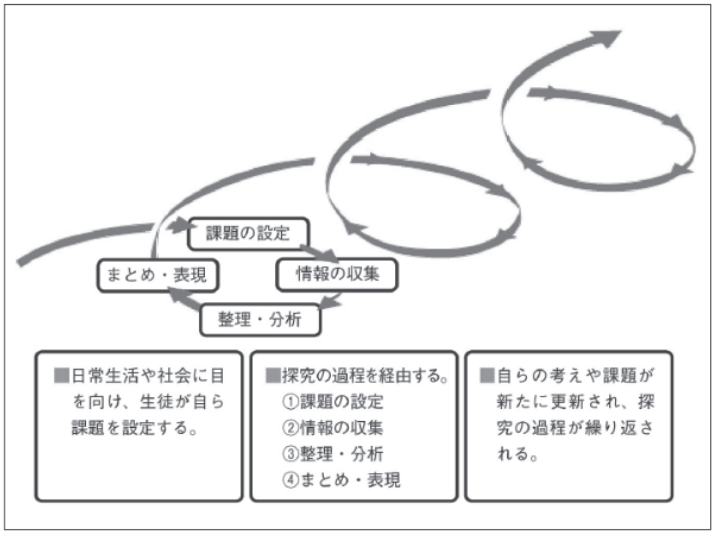


図 1：探究における生徒の学習の姿

出典：『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説
総合的な探究の時間編』（文部科学省、2018 年）

すべきものとして、たとえば、文教学院大学と併設の文教学院大学女子高等学校との連携では、併設の強みを生かし、高等学校の「総合的な探究の時間」に大学内で福祉、心理の講座を開設して高校生に受講させている（川合　2018）。また、京都光華大学と京都府立東稜高等学校及び京都府立北稜高等学校の連携のように、大学側が高校生に対して一定期間にわたり防災・環境教育及び SDGs 教育に関する講座を開講するといったカリキュラムレベルでの事例もある（高野ら　2021）。

池田高校と教職課程センターの連携の内容に比較的似ていると見られる事例としては、静岡県立大学と静岡東高等学校との連携が挙げられる。この連携では、高等学校の「総合的な探究の時間」に、静岡県立大学国際関係学部の教員や大学生がファシリテーターとして参加し、高校生の各チームが取り組む研究課題に対して指導・助言を行っており、高等学校側の担当教員は「「深い学び」の実現には、大学や NPO、自治体といった学校外の方々の協力が欠かせない」と述べている[4)]。ただし、この事例においても支援の中心的な担い手となっているのは、あくまでも大学教員である。

さらに、教員養成教育に関わる高大連携の事例としては、文部科学省が公表している「高等学校と大学との連携の取組事例」において、京都府教育委員会の取組として小学校などでの大学生の体験実習、教育ボランティアとしての受け入れなどが紹介されている[5)]。しかしながら、上述の事例集においては教職課程を履修する大学生が中心となって「総合的な探究の時間」の支援に関わるという事例は見られない。本稿では、教員養成教育の質的向上を目指した高大連携の望ましい在り方とはいかなるものかという視点から池田高校と教職課程センターの実践を具体的な実践を取り上げながら考察していくことにしたい。

2. 発端と事前準備

2021 年 11 月 5 日、池田高校の校長から教職課程センターに対して、「生徒たちが「総合的な探究の時間」のなかで取り組んでいる課題研究に対して大学生の目線から助言や支援をしてほしい」との依頼があった。上述した「課題研究」とは、岐阜県内の公立高等学校として初めてユネスコスクールへの加盟を果たした同校において、生徒たちが持続可能な開発目標（以下、SDGs）の達成に向けて学習に取り組むものである。

これを受け、教職課程センターは 2022 年度から池田高校との高大連携事業を正式に開始することを決定し、同校の生徒に対する適切な支援の在り方を模索するため、2022 年 2 月 9 日に教職課程履修学生を派遣して実際の課題研究の様子を参観させる計画を立てた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となった。そこで、教職課程担当教員の一人である虫賀文人が池田高校を訪問し、課題研究の取組状況を視察した。そして、①生徒たちは､5 限の「総合的な探究の時間」と､6 限のホームルーム活動の時間を使って、「高齢社会」「環境」「福祉」「町作り」「外国人の人権」「医療・介護」などの問題について、グループごとにテーマを決め、調べ学習を行っていること、②調べたものを模造紙にまとめ、既に発表用の原稿を作成する段階に進んでいるグループもあること、③今後、クラス、学年、全校で発表する予定であり、校長から、2022 年度、大学生の助言や支援を受けて課題研究のレベルアップを図りたいという依頼があったこと、の 3 点について、教職課程を履修する大学生及び大学教員に対して報告した。

2022 年 3 月 8 日、教職課程履修学生 8 名、教職課程担当教員 6 名が、次年度から始まる高大連携における具体的な支援の在り方を探るために、池田高校を訪問した。初めに同校の教頭から次年度に向けた支援の内容に関する説明がなされ、その後、1、2 年生の課題研究発表会を参観し、期待される役割について認識を深めた。

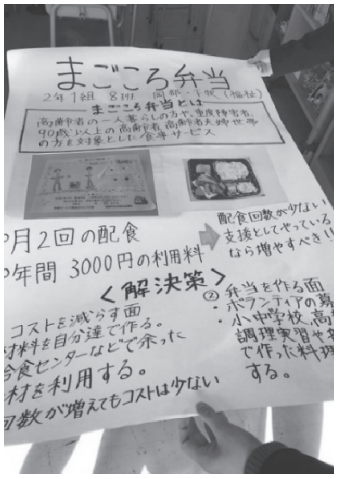


写真 1（左）：発表原稿の作成に取り組む高校生
写真 2（右）：完成した発表用原稿

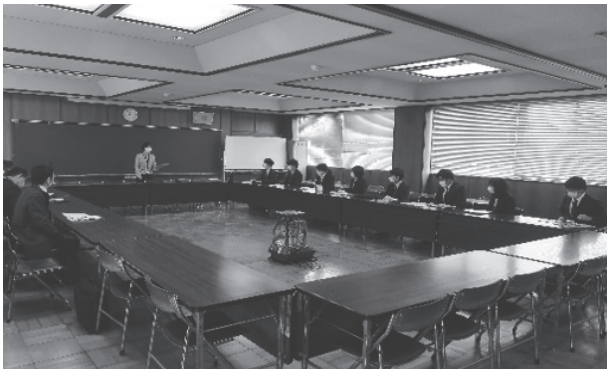


写真３：教頭による支援内容に関する説明

写真４：課題研究発表会の参観

3. 2022 年度の取組

（1）クラス内発表の助言と支援

2022 年 6 月 1 日、池田高校 1、2 年生の「総合的な探究の時間」におけるクラス内発表会に、教職課程履修学生 8 名、教職課程担当教員 6 名が参加した。大学生には「自発性や自律性を育むための助言や支援の仕方を学ぶ」という目的意識を持たせたうえで、生徒たちとの交流を行わせた。担当クラスの割当は、以下の**表 1** のとおりである。

5 限に実施された 1 年生のクラス内発表会においては、各クラスに 8 ～ 9 のグループが構成されており、各グループ 2 ～ 3 分程度でパワーポイントを使った発表が行われた。教職課程履修学生たちは、1 グループの発表が終わるごとに仮説の立て方や調べた内容の適切性について助言と支援を行った。また、6 限の 2 年生の発表会では、前年度に取り組んだ SDGs に関する学習成果の発表をブラッシュアップするかたちで行われた。クラス内で、すでに半分のグループが発表を終えていたため、残り半分のグループが発表した。発表時

表 1：クラス内発表会における割当

5 限（13:15-14:05）	1 年 1 組	1 年 2 組	1 年 3 組	1 年 4 組
6 限（14:15-15:05）	2 年 1 組	2 年 2 組	2 年 3 組	2 年 4 組
担当学生 （ ）内は学年	A（3 年次） B（3 年次）	C（4 年次） D（4 年次）	E（4 年次） F（4 年次）	G（3 年次） H（4 年次）
担当教員	山下・亀田	石原	藤田・足立	虫賀

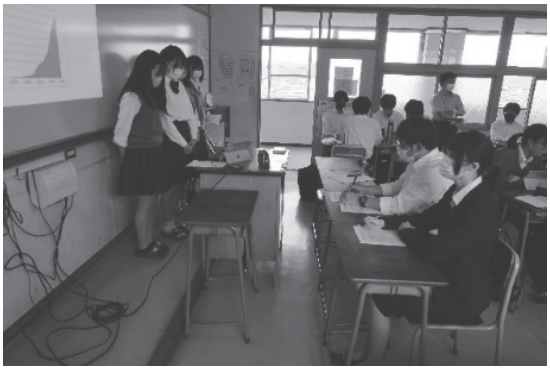


写真 5：課題発表に対する助言と支援の様子

間は 1 グループ 5 分程度である。大学生たちは 1 グループの発表が終わるごとに仮説が深まっているかどうか、発表の仕方が適切であったかどうかなどについて助言と支援を行った。

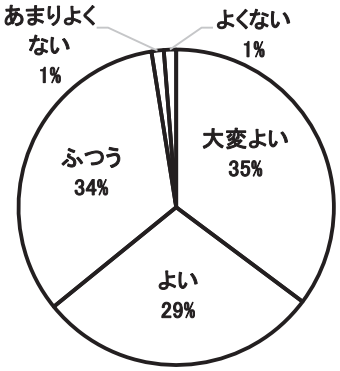
上述の活動が終わった後、高等学校側の生徒と教員、及び大学側の学生と教員を対象とするアンケートを実施した。その結果を見ると、高等学校側・大学側の別を問わず、ほとんどの参加者が、この高大連携について「意義がある」と回答している。

高等学校側の参加者を対象としたアンケートでは、「大学生からアドバイスを受けることが役に立つ」と回答している割合が 83％であり、その理由として、「大学生の考えを知ることができる」、「研究のレベルを上げることができる」、「視野が広がる」という意見が多かった。また、アドバイスの仕方については、普段の取組段階からの支援や大学生との意見交換の場の設定を望む声が多く、アドバイスの内容としては、プレゼンテーションの作り方や仕方、資料の収集方法や内容を深める方法を望む声が多いことがわかった。

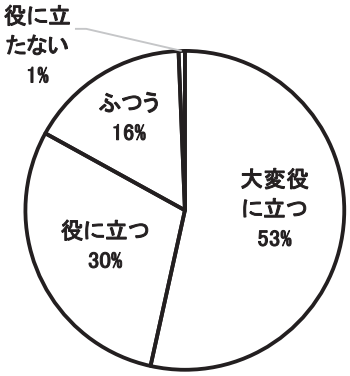
大学側の参加者を対象としたアンケートでは、高校生と同様に、普段の取組段階からの支援の必要性を感じている大学生が多いこと、また、助言を行うために自らも研鑽を積まなければならないと実感した大学生が多いこともわかった。大学教員からは、この連携を充実したものにするために、事前の研修や準備が必要であるという指摘もあり、今後、連携を進める上での参考になった。

池田高校と朝日大学の高大連携に関するアンケート結果（池田高校）
（1、2年生及び教員の159名が回答）

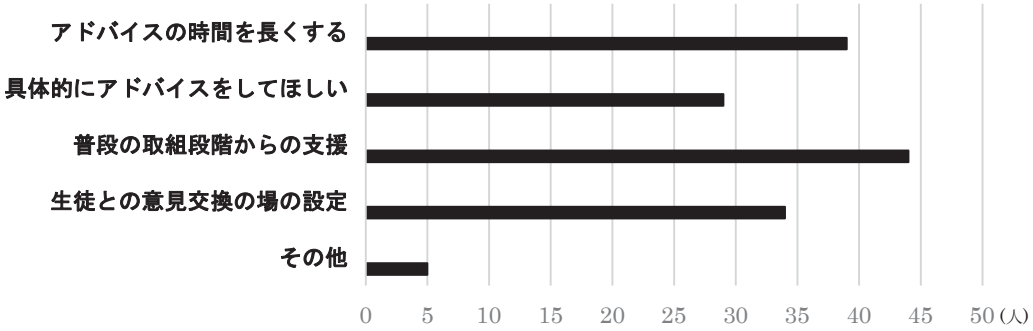
1．大学生と交流するこの事業をどう思うか



2．大学生のアドバイスは役に立つか

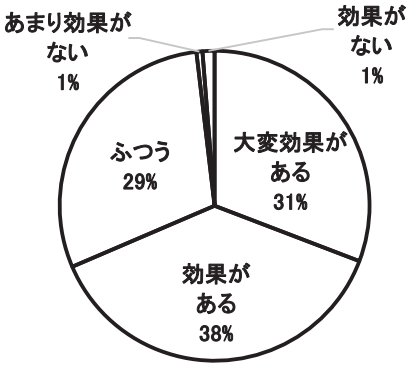


3．アドバイスの仕方について改善した方がよい点は（複数回答可）

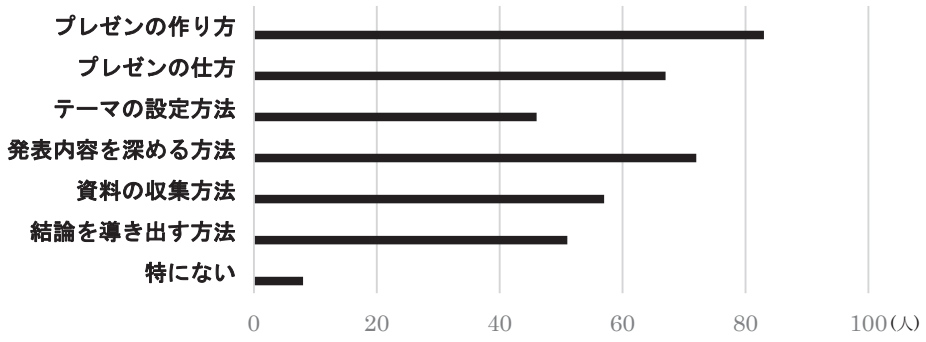


（その他の回答：「満足」、「もっとよい点をほめてほしい」（2名））

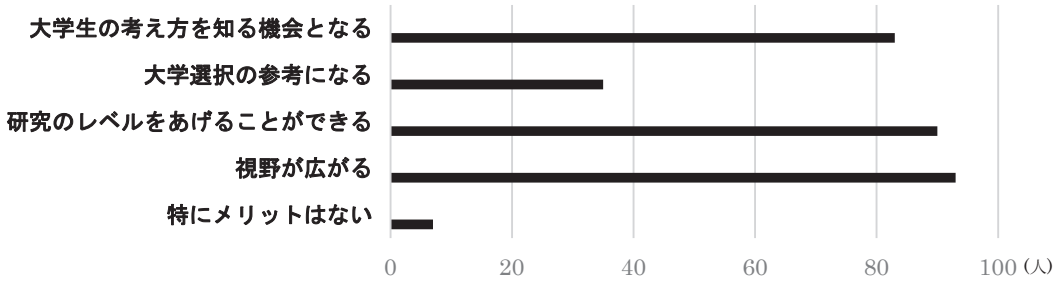
4．今後、11月に高校生の課題研究に対して大学生がグループごとに個別に支援する企画が予定されているが、どう思うか



5．今後、大学生から学びたいことは（複数回答可）



6．大学生と交流することの意義は（複数回答可）



7．その他の自由回答

・すごく的確なアドバイスでためになった。
・いろいろな角度からのアドバイスがあり、とても参考になった。
・プレゼンに口を出すと大学生のプレゼンとなり個人色がなくなると思う。
・大学生にも発表を「お手本」としてやってもらいたい。

池田高校と朝日大学の高大連携に関するアンケート結果（朝日大学）
（教職課程履修学生８名、教職課程担当教員６名が回答）

1．この高大連携に参加してよかったか

項目	学生	教員
大変よかった	7	5
よかった	1	0
ふつう	0	1
あまりよくなかった	0	0
よくなかった	0	0

2．高校生の発表や課題への取組状況（1 年）

項目	学生	教員
大変よかった	2	2
よかった	3	3
ふつう	2	1
あまりよくなかった	1	0
よくなかった	0	0

2. 高校生の発表や課題への取組状況（2 年）

項目	学生	教員
大変よかった	1	3
よかった	5	0
ふつう	2	2
あまりよくなかった	0	0
よくなかった	0	1

3．高校生の取り上げたテーマは（1 年）

項目	学生	教員
大変よかった	4	1
よかった	3	2
ふつう	1	3
あまりよくなかった	0	0
よくなかった	0	0

3．高校生の取り上げたテーマは（2 年）

項目	学生	教員
大変よかった	5	1
よかった	3	2
ふつう	0	3
あまりよくなかった	0	0
よくなかった	0	0

4．適切なアドバイスができたか

項目	学生	教員
よくできた	3	5
できた	1	0
ふつう	4	1
あまりできなかった	0	0
できなかった	0	0

5．この高大連携は高校生の研究に役立つか

項目	学生	教員
大変思う	5	4
思う	3	2
ふつう	0	0
あまり思わない	0	0
思わない	0	0

6. この高大連携は高校生と大学生との交流を促進するか。

項目	学生	教員
大変思う	5	5
思う	2	0
ふつう	1	1
あまり思わない	0	0
思わない	0	0

7. この高大連携は教員を目指す学生にとって有益か。

項目	学生	教員
大変よかった	8	6
よかった	0	0
ふつう	0	0
あまりよくなかった	0	0
よくなかった	0	0

8. その他の自由回答（大学生）

・教育実習前に高校生への指導を体験することができたので良いウォーミングアップになった。この事業は続けてほしいと思った。
・教育実習前に高校生と交流ができて、とても有意義な時間を経験させていただきありがたかった。2 年生からテーマが SDGs に絞られて仮説・考察が難しくなるが、11 月頃の話し合いに向けて、私自身も教養を身に付けておきたいと思った。
・パワーポイントを用いた研究の成果を発表するという経験が、今後とても役に立つと思うので、いい取組だと思った。
・生徒のプレゼンの時だけ参加すると、知らない人たちが来ていきなり評価される形になるため、取組段階のサポートから入った方がいいと思う。その方が生徒との交流も深まると思う。教育実習前の貴重な体験となった。
・高校生同士で意見を言い合うのと、大学の先生や学生からも助言をもうらのとでは感覚が違うと思った。テーマの選定が非常に興味深くて面白かったし、私自身も、もっとそのテーマについて知りたいと思う時間でした。
・アドバイスするために内容面だけでなく私たちの話し方なども手本になると思い、私自身そこを高めたいと思った。高校生は身近に大学生や大学の先生と関われる機会が増え、もっと関われると「大学ってどんなところ何だろう」というのも大学検討段階でイメージしやすくて進路を決めやすいと思った。
・初めて参加させていただいたが、研究テーマが興味深いものばかりで聞いていてとても楽しかった。先日まで教育実習に行っていたが、実習先の高校生の雰囲気とはまた違った生徒たちで、とても面白かった。
・教職を目指している学生として学んだことが多くあって高校・大学の先生方への感謝の

思いでいっぱいである。昨日の連携事業では発表に向けてこれまで時間をかけて準備してきたことが伝わる発表が多く仲間の話を真剣に聞く姿が印象に残っている。そのような発表の様子を見ることができてうれしかった。今回の連携事業で学んだことを活かしてこれからの教育実習をはじめとする教職の活動に取り組んでいきたい。
・1、2 年生の発表は大変素晴らしかった。普段は発表する側で、アドバイスをする経験がなかったので大変新鮮であった。
・教育実習前に高校生への指導を体験することができたので良いウォーミングアップになった。この事業は続けてほしいと思った。

8. その他の自由回答（大学教員）
・クラス担任（副担任）の指導具合により、学年を問わず内容や出来栄えに多少の差を感じた。教育現場でのご苦労を改めて感じつつ、本学学生にもあらゆる角度から教師の在り方を探っていける機会にもなると実感した。本学学生が今後も適切なアドバイスができるように授業の中でも指導していきたい。
・前回、今回は高校生の当日の発表を受けてコメントをするだけだったので、時間制約もあり、お互い十分なコミュニケーションをとるところまではいけなかったと感じている。
・2 年生の生徒たちの発表は、3 月に訪問した際と比べると、発表中の態度やスライド資料のまとめ方という点では上達していたように思う。
・探究的に学習する際に、どのようなアクセスをすると知りたい情報を収集できるのか、そこの指導をもう少ししてあげる必要があるように感じた。
・参加する大学生の方にも、問いの立て方や調べ方などを、高校生にアドバイスに行く前に、一度説明してやらないと、高校生と「数歳年長の高校生」が這い回るだけの交流になってしまわないかと、今回の訪問に参加して少し危惧を覚えた。
・教師を目指す学生にとって、高校生にどのような助言や支援を行えば学びを深められるのか、自律的・自発的に学ぶためにどうすればよいのかを認識できるという点で意義のある交流となった。また適切な助言を行うためには自らも研鑽を積まなければならないことを自覚できたと思う。朝日大学生の真摯に対応する姿を高校生が見て、朝日大学にあこがれを持ち、入学したいと思ってもらうことも、この高大連携の 1 つの意義である。
・大学生の高校生への助言としては、今回の発表は中間発表であるため、感想だけでなく、今後の目指す方向性をより意識して助言できるとよかった。やはり事前に学生と共通理解を図るべきでした。高校生の研究についても、ネット上から得たものや自分たちの考えだけでなく、家庭や地域でインタビューやアンケートをする方法などもあるので、調査方法についても今後、助言していきたい。
・クラスによって温度差があった。また研究がまとまりすぎていた。実際に役立つようにした方がよい。

（2）教育連携協定の締結

高大連携を持続的なものとし、相互の関係をさらに発展的なものとするためには、協定の締結が必要である。双方のこうした思いから、2022 年 10 月 5 日、池田高校校長と朝日

大学学長との間で教育連携協定の締結式が行われた。同協定は、「総合的な探究の時間」に留まらず、さまざまな分野におけるより緊密な連携を可能にするものとなっている。具体的な内容については、以下のとおりである。

> 岐阜県立池田高等学校と朝日大学は、相互に連携・協力し、高い志と国際感覚を持って地域社会の発展に貢献できる人材を育成することを目的として相互に協力することに合意し、次のとおり協定を締結する。
>
> （活動の内容）
> 1. 岐阜県立池田高等学校が実施する「総合的な探究の時間」における生徒の活動に対して、朝日大学が協力・支援を行う。
> 2. 岐阜県立池田高等学校が実施するユネスコスクールとしての活動や朝日大学が実施する SDGs（持続可能な開発目標）に係る活動において相互に協力し合う。

ここに見られるように、この協定は SDG に関わる連携を大きな目標としている。これまで朝日大学は、「国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間的知性に富む人間」の育成という建学の精神に基づいて、教育・研究・医療活動を中心に SDGs の達成に向けて取り組んできた。一方、池田高校は冒頭で触れたように、ユネスコスクール加盟校として 2015 年から「持続可能な開発のための教育」を実践に着手し、現在は、それを SDGs の活動へと発展させ、「福祉」「国際」「環境」の三つを柱として「地域・国際社会の中でよりよく生きる人間」の育成に努めている。このような相互の成果を踏まえた SDGs を中心とした積極的な協力において、教職を目指す大学生が積極的に関わっていくことには大きな意義があると考えられる。

なお、上述した締結式に続いて、第 1 回目の高大連携協議会も開催され、朝日大学の教職課程履修学生による池田高校の授業の見学を可能とすること、池田高校が行っている「ふるさと教育授業」において朝日大学の学長が講演を行うこと、池田高校と朝日大学留学生別科生との間で英語による交流会を開催すること、朝日大学が提携している中国及び米国の大学生が来日した際には、池田高校の生徒とも交流を行うこと、などが決定された。

写真６：教育連携協定の締結

（3）研究課題の設定に関する助言と支援

先述した 2022 年 6 月 1 日の訪問の折に実施したアンケートの結果に見られた、普段の取組段階からの支援を要望する声に応え、10 月 5 日、池田高校の「総合的な探究の時間」に教職課程履修学生 8 名、教職課程担当教員 5 名が参加し、助言と支援を行った。当日の担当クラスの割当は**表２**のとおりである。

生徒たちは、各グループに分かれて、① SDGs の 17 の目標と 169 のターゲットを参考に、個々人が興味・関心を持つテーマを考える、②考えたテーマを自分たちの住む社会や暮らしの問題に置き換えることができるかどうかを考える、③考えたテーマ（＝抽象的で耳障りのよい言葉）を、具体的・客観的で明確な「解決すべき課題」となるような言葉に置き換えていく、④個々人のテーマや「解決すべき課題」をグループ内で発表し、評価し合い、グループとして取り組む課題へと絞り込む、⑤「解決すべき課題」について、どのようなことがわかっていないのかを調べる、という五つの手順で話し合いを行っていた。大学生たちは、各グループの議論に適宜参加し、テーマの設定方法、先行研究の活用、発表内容を深める方法、資料の収集方法、仮説の立て方などについて、状況に応じて助言と支援を行った。

前回の訪問から約 4 ヶ月経っていたことも手伝ってか、当初、生徒たちには親しく交流することをためらう様子も見られたものの、大学生たちが積極的に各グループに関わり、何気ない会話から始めたことで、自然と打ち解け、質疑応答が飛び交う充実した時間となった。

表２：「総合的な探究の時間」における割当

5 限（13:15-13:40）	2 年 1 組	2 年 2 組	2 年 3 組	2 年 4 組
担当学生 （ ）内は学年	A（3 年次） B（3 年次）	C（4 年次） I（4 年次）	J（4 年次） K（4 年次）	L（4 年次） M（4 年次）
担当教員	和田・亀田	石原	足立	虫賀

写真７：研究課題を設定する生徒への支援

写真８：研究内容を絞り込む生徒たちへの助言

以上に述べた、普段の取組段階からの支援には大きな意義があるだろう。なぜなら、高校生の最終的な発表だけを見て大学生が批評すると、反感を抱く者も出てくると考えられるからである。従って、前掲の**図 1** で示した課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現のすべての過程において、大学生が高校生と同じ目線に立って、高校生の意見を十分に尊重しながら助言や支援をしていくことが大切といえる。継続的に関わり続けることで、高校生も大学生に対して親近感を持ち、最終的な発表に対する批評も真剣に受け止めることができるようになるだろう。

助言と支援が終わった後は、各教室を退出し、会議室において池田高校側の関係者と朝日大学側の参加者とで意見交換の場を持った。はじめに、池田高校の校長から、高大連携の意義、大学生の支援に期待すること、高校生が失敗から学ぶことの重要性について説明があった。これに対して大学生からは、今後の高校生の取組に対して、研究テーマが漠然としていてわかりにくいので具体的な事例を挙げながら示すとよいこと、インターネットだけでなく、実際に現場に足を運んで情報を得ることが大切であること、などが提案された。

（4）池田高校における授業見学

教育連携協定が締結されたことによって池田高校の授業を見学することが可能になったため、2022 年 11 月 10 日、教職課程を履修している法学部 3 年次 9 名、経営学部 3 年次 5 名、及び教職課程担当教員 3 名が池田高校を訪問した。地歴公民科の教員を目指す法学部の学生は「世界史 B」「日本史 B」の、商業科の教員を目指す経営学部の学生は「情報 A」の授業を、それぞれ 5 限に参観した。大学生たちにとって、次年度に予定している教育実習に向けて、現職の高等学校教員による授業設計や手法、生徒への対応、教材の取り扱い方に留まらず、学校教育現場の雰囲気や ICT の導入や活用の状況などについても知る機会となった。以下に掲げる授業見学に関するアンケートの結果からも、教育実習前に学校教育現場で体験を積むことの重要性を窺うことができる。

写真 9：「情報Ａ」の授業見学の様子

池田高校における授業見学に関するアンケート結果（2022 年 11 月 10 日実施）
（法学部３年次９名、経営学部３年次５名が回答）

1．授業見学に意義はあったか

項目	人数
大変意義がある	8
意義がある	6
あまり意義がない	0
意義がない	0
わからない	0

2.「意義があった」と答えた理由（複数回答可）

項目	人数
教育実習に行く前のよい経験になった	5
生徒の様子を見ることができた	7
授業の手法を学ぶことができた	5
生徒対応を学ぶことができた	5
高校の雰囲気を知ることができた	6
ICT の導入について知ることができた	3

3．今後も継続した方がよいか

項目	学生
大いに思う	8
思う	6
あまり思わない	0
思わない	0
わからない	0

4．その他の自由回答

・現場の先生の授業の導入の仕方、全体の進め方などを学ぶ貴重な機会となり、来年度の教育実習に向けて大変ためになった。
・ICT 機器と板書をどのように組み合わせていくのかという点で大変参考になった。
・先生が講義をするだけの授業ではなく、ペアワークなどを取り入れ、生徒一人一人が考える授業が展開されていて、生徒がとても楽しそうだった。そうした授業を自分も心がけたいと思った。
・生徒とのコミュニケーションを大切にされた授業が展開されていた。エピソードなども取り入れ、興味関心を引き出す工夫がされていた。専門性を身に付けることの大切さを学ぶことができた。
・学校や生徒の雰囲気を知ることができた。すべての生徒が必ずしも教師が望むような反応をしてくれるわけではない中で、そうした生徒にどう対応するのかを学ぶことができた。授業準備の大切さも痛感した。
・教師の声の大きさ、抑揚などを勉強することができた。生徒の反応を見ながら授業が展開されていた。生徒同士で理解を深めていく場面もあり、授業にメリハリがあった。
・一人一台のタブレットなど ICT 機器が十分に活用されていて、ICT 機器を使いこなすことの必要性を感じた。

（5）オンラインによる助言と支援

2022 年 11 月 16 日、教職課程履修学生 8 名、教職課程担当教員 7 名が、池田高校で行われた 2 年生の課題研究にオンライン・ミーティング・システムを通じて参加し、高校生の学習の進捗状況の報告を受けるとともに、彼らからの質問に対して助言や支援を行った。こうした交流の在り方は、新型コロナウイルス感染症が拡大する以前であれば、準備に時間がかかり、非常な困難さを伴うものであった。しかし、いわゆる「コロナ禍」の中で遠隔授業が日常的なものとして普及したために容易に実現できるようになった。池田高校と朝日大学との間には自動車でも約 30 分かかる距離があるため、オンライン・ミーティング・システムを導入することは大変有効である。当日は、大学内に交流会場を 4 ヶ所設け、池田高校の各クラスと繋いで助言と支援を行った。当日の担当クラスの割当は**表３**のとおりであるが、原則として 10 月 5 日の交流時と同じ大学生が継続的に当たれるように配置した。

また、当日の高校生と大学生との質疑応答の一例を**表４**に示しておきたい。大学生は、高校生からの質問に対し、そのまま答えを提供するのではなく、主体的に調査し、追究するための手がかりを与えるよう心がけて助言を行った。

写真 10：オンラインによる交流の様子

表３：オンラインによる助言と支援の割当

5 限（13:15-13:40）	2 年 1 組	2 年 2 組	2 年 3 組	2 年 4 組
担当学生 （ ）内は学年	A（3 年次） B（3 年次）	C（4 年次） I（4 年次）	J（4 年次） K（4 年次）	L（4 年次） M（4 年次）
担当教員	和田・亀田	山下・石原	足立・藤田	虫賀
大学内会場	パソコン教室 3	パソコン教室 4	6502 教室	6503 教室

表４：質疑応答の一例

テーマ	高校生の質問内容	大学生の回答内容
養老鉄道を継続させるためにはどうするべきか。	・交通の便について何か考えることはあるか。 ・池田町を活性化するためにどんなことに心がけて企画を作っていったらよいか。 ・利用者を増やすにはダイヤの改正以外に何か方法はあるか。	・池田町役場の担当者や養老鉄道の駅員にインタビュー調査をする。 ・近隣の樽見鉄道、長良川鉄道、明智鉄道などの企画について調べてみる。 ・養老鉄道を利用する他の高校（大垣養老高校や大垣南高校）との連携を考えてみる。 ・校内の利用者にアンケート調査をしてみる。 ・実際にグループで養老鉄道に乗車し、その体験から考えてみる。 ・池田町の観光資源を取り上げ、養老鉄道と結びつけることができるか考えてみる。

おわりに

以上、池田高校と職課程センターによる「総合的な探究の時間」を中心とした交流の経緯と概要について報告しつつ、教職を目指す大学生にとっての高大連携の意義について考察してきた。本稿執筆中の 2022 年 11 月末現在、次の交流として、2023 年 2 月 8 日に、池田高校の学年課題発表会に大学生が参加し、発表の内容や仕方、今後の学習の方針などについて助言を行うことになっている。当日は、これまでの高大連携を通して高校生がどのように成長していったのかを確認する機会にもなるだろう。さらに、3 月下旬には、池田高校との間で第 2 回連携協議会を開催し、2022 年度の取組を検証しながら次年度の高大連携をより充実したものにできるよう計画を練っていく予定である。

高等学校の「総合的な探究の時間」の目標が、横断的・総合的な学習を行うことを通して自己の在り方生き方を考え、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することとされていることを踏まえると、高校生が取り組む課題研究に対して教職を目指す大学生が関わっていくことには大きな意義がある。すなわち、高校生の主体性や自発性、自律性などを育むためには、教えすぎない、レールを敷きすぎないといったことが大切であり、そのための助言や支援のあり方を学ぶには、「総合的な探究の時間」が最適な科目だと考えられるからである。このことは、参加者を対象に実施したアンケートにおいて指摘された、高校生の普段の取組段階から支援を行うことの必要性や、大学生に高大連携の意義や助言と支援の狙いを明確に自覚させることの重要性といった諸課題の解決に取り組むなかでより明確になった。

ただし、上述した意義をより深めていくためには、いくつかの克服しなければならない新たな課題も見えてきている。それらのうち、最も重要と考えられるのは、この高大連携には朝日大学の教職課程や年間行事の中に体系化された位置が与えられていないことである。従って、現状では、池田高校への訪問や高校生との交流は、授業や部活動の予定のない有志の教職課程履修学生によって取り組まれており、そのために、相対的に時間にゆとりのある4年次の学生が主な担い手となっているのである。だが、冒頭で紹介した川合宏之（2018）が指摘していた、高大連携に関わることによる大学生側のメリットを最大限に生かすには、むしろ1、2年次の早い段階から学校教育現場を体験し、教職に対する志望を高めたり、自らの適性について省察したり、生徒の主体性を育む指導の在り方について学んだりする機会を豊富に提供していくことが望ましいだろう。

池田高校と教職課程センターとの高大連携は始まったばかりである。高等学校と大学とが対等な関係に立ち、双方にとってより深い意義や高い効果が得られる連携の在り方を実現するべく、他大学の優れた教員養成教育の計画[6]にも学びつつ教職課程の改善に不断に取り組んでいく必要がある。

〔註〕

1）中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201e.htm）。

2）川合宏之「我が国における高大連携の変遷と今後の展望」『経済教育』第37号、経済教育学会、2018年9月、21-22頁。

3）文部科学省編『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　総合的な探究の時間編』文部科学省、2018年7月、11頁。

4）「実践事例2　静岡県立静岡東高校　総合的な探究の時間の不断の改善が、教科の授業改善にもつながる」（『VIEW next 高校版』8月号、ベネッセコーポレーション、2022年8月、14-15頁。

5）文部科学省「高等学校と大学との連携の取組事例について」（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/siryo/attach/1367073.htm）。

6）こうした問題意識に対する一つの手がかりとして、2022年6月24日に教職課程センターが朝日大学内で開催した教職員研修会の内容が参考になるだろう。そこでは、講師として招聘した岐阜聖徳学園大学教育学部長の秋山晶則氏より、同学部が推進してきたクリスタルプランと呼ばれる教員養成計画の概要について解説がなされた。同計画においては、教員になることへの憧れや動機が強い1、2年次の早い段階から学校教育現場での経験を積ませているという。教員養成を主たる使命とする教育学部の仕組を、学科に併設されている朝日大学の教職課程にそのままのかたちで導入することは難しいとしても、今後、大いに参考にすべき事例といえよう。

〔参考文献〕

・高野拓樹、松原久、糟野譲司、乾明紀、久保友美、杉岡秀紀、サトウタツヤ「高大連携型教育を用いた探究学習に関する実践的研究－探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因－」京都大学学際融合教育研究推進センター地域連携教育研究推進ユニット『地域連携教育研究』第 6 号、2021 年 1 月。